都市大と卒業生をつなぐ広報誌

東京都市大学

② ご挨拶
④ 夢に翼を！変わりゆく東京都市大学
⑩ 東京都市大学オーストラリア
プログラム（TAP）
⑫ 最先端研究：澤野憲太郎准教授
⑭ 卒業生からのメッセージ：松島咲季子さん
⑮ EVENT：ホームカミングデー開催
⑯ NEWS Watching
⑱ 挑戦者たち：都市大空手道部
⑳ 東京都市大学グループ通信
㉒ 校友会の支援活動：ワンコイン朝食

VOL. 1 2015年4月

⑩東京都市大学オーストラリアプログラム（TAP）

❷三木千壽新学長

⑯新しく開設された歴史展示コーナー

❻施設紹介　新1号館

❻施設紹介　総合グラウンド

⑫最先端研究
澤野憲太郎准教授

⑭卒業生　松島咲季子さん

⑱都市大空手道部が全国大会2連覇

⑰平成26年度学位授与式

2030年までに世界大学ランキング300位以内を目指します

東京都市大学 学長 三木 千壽

大学の役割は、社会の発展を担う人材の育成と、知の拠点として社会に貢献することです。東京都市大学は教育と研究の両面で、国際標準の大学に進化することを目標としての改革を進めています。アクションプランに掲げた「2030年までに世界大学ランキング300位以内」は、その改革の結果として到達できると考えています。

人材の育成は大変な事業です。「1年の計、莫如樹穀。10年の計、莫如樹木。終身の計、莫如樹人。」は、中国の管子の言葉です。その意味は「穀物を栽培するのは1年間、木を育てるのは10年間、人を育てるのは終身の計画」です。アクションプランは2030年での到達目標を示していますが、真の人材育成にはさらに長い計画が必要ということになります。あるいは、常に見直しながら進むということかもしれません。

都市大での「人材育成の計」を立てるには、育成する人材の姿を明確にする必要があります。武蔵工大では「実践力、専門力」を大事にしてきました。社会のグローバル化を考えれば「世界で活躍できる」が必須です。また、リベラルアーツ系の教育の強化が必要なことは、大学カリキュラムの大綱化で教養教育を軽視した結果として、指摘されていることです。これらのことに応えられるように学部と大学院を通してのカリキュラムを構成する必要があります。

研究は大学の高度人材育成に必須です。研究の香りの無い場では人は育ちません。大学力を測る指標も、論文数、インパクトファクターの合計値、科学研究費の件数と総額、公的競争資金、委託研究、共同研究など、研究に関係するものが大きな割合を占めています。大学全体で、研究を推進するような環境と体制を作り上げることが必要です。講義やさまざまな雑事のために研究する暇が無い、との声も聞こえてきますが、その原因を除去することであると考えています。

2018年からは18歳人口が110万人までに減少します。2020年にはセンター試験が変わります。G型大学、L型大学などの大学の分類、格付けも進んでいます。まさにそれぞれの大学の真価が問われているといえます。東京都市大学は世界でリーダーシップを発揮する人材バンクとしての役割を果たせるよう、努力を続けます。

松下 正勝
東京都市大学 校友会会長
(昭和40年武蔵工業大学
土木工学科卒)

3つの事業推進にご協力を！

今年は雪国では観測史上記録的な積雪で多くの被害が発生した冬でした。

ようやく首都圏でも卒業式前に春めいて参りました。

皆様ご高承の通り、去る2月24日の新聞に武蔵工大機械工学科を昭和57年に卒業した八郷隆弘氏が本田技研工業の社長に6月昇格する記事が掲載されました。常務役員から9人飛び越える大抜擢人事です。自動車メーカーとして母校出身者では初めてですので、校友会全員で祝福し、今後の活躍を期待しています。

さて、校友会は平成25年4月発足し、26年度から本格的事業も始動いたしました。会員在籍者数が9万人おり、全国に42の地方支部、26の職場支部、2つの海外支部があります。各支部の活動にぜひご協力下さい。

校友会の3大目的。1.母校・学生への支援、1,000万円規模の奨学金給付。2.会員相互の親睦、秋田支部から始まり、全国の10支部で美砂会会員も参加した総会開催。3.学科同窓会・支部への支援、14学科へ各15万円、23地方支部へ支部総会参加人数に応じた支援と順調に事業を推し進めています。

ところで、ホームカミングデーを大学と校友会共催で実施しております。卒業後10年・20年・30年・40年・50年の節目の卒業生を母校に招待しています。今年は文化の日近くの11月1日(日)開催予定ですので、新しく変わった東京都市大学に皆様、同期生をお誘いの上、ご出席いただけるようお願いします。

私達、昭和40年に土木工学科卒業生で緑土40年会を結成しています。恩師小玉名誉教授を囲み毎月第1月曜日4時から渋谷のかつ吉で会食しています。卒業後昭和47年に第1回ゴルフ大会を箱根仙石GCで開催し、昭和58年第40回をハワイで、50回をタイ、60回を韓国、70回をオーストラリア、80回をカナダ、90回をアメリカ、100回をモロッコ、110回をメキシコ、120回をトルコで旅行も兼ねながら開催しました。最近は2～3年に1回、寒さを逃げて2月頃、暖かい東南アジアで開催しています。タイに4回、ベトナムに1回、マレーシアに1回で今年もマレーシアで開催し、小玉先生(今年4月で83歳)が元気に3日ゴルフをプレーしました。我々も80歳まではゴルフを続けるよう皆で足腰を鍛えて日々健康に留意しています。

会員の皆様も是非同期生と恩師を囲んで飲み会・ゴルフ会・旅行会を実施して人生を楽しんでください。会員皆様のご健康とご多幸をお祈りし、東京都市大学広報誌発行にあたってのご挨拶とさせていただきます。

川辺 加代子
校友会常任幹事・
新美砂会 副会長
(昭和50年東横学園
短期大学国語国文学科卒)

今こそ母校との強固な絆を！

全国の会員の皆さま、ご健勝でご活躍のこととお慶び申し上げます。

母校武蔵工業大学と東横学園女子短期大学の統合に伴い、それぞれの同窓会「武蔵工業会」「美砂会」も統合し、「東京都市大学校友会」を発足いたしました。

その後、卒業生を中心に大学の教職員の皆さまとともに各種委員会や支部活動、諸行事等々に取り組みながら、早いもので2年の月日が過ぎようとしております。

現在母校では、吹き荒れる少子高齢化の荒波を乗り越え、世界的に進展するグローバル化に対応するため、教職員の皆さまが総力を結集して大きな改革に取り組まれております。

そのなかで、いま校友会が果たすべき役割は何かと考えてみたとき、校友会が積極的に母校と会員を繋ぐパイプ役となり、さらに絆を深めていくために力を尽くすことこそが、大きな役割の一つではないか思います。そのためにも、より多くの会員が活動に参加出来るような魅力と活力あふれる校友会の構築が急がれていると痛感しながら、日々の活動に邁進しております。

さて、このたび大学より私ども卒業生向けの広報誌が発行されることになりました。誌面を通して伝えられる母校の最新の情報を共有することで卒業生同志の連帯感が強まり、さらには卒業生相互及び母校との絆が深まるよう願ってやみません。それこそが母校東京都市大学を支え、発展に寄与できる大きな力となることでしょう。

最後に母校並びに校友会へのご支援とご協力を心よりお願い申し上げ、東京都市大学広報誌発刊に寄せてのご挨拶とさせていただきます。

特集 夢に翼を！変わりゆく

校名変更を経て、未来志向の大学へ

2009年度に、前身校である武蔵工業大学と東横学園女子短期大学が統合し、改称とともに総合大学として新たなスタートを切った「東京都市大学」。その東京都市大学も2015年度で7年目を迎えました。

「若者が夢を見なくなった」と言われて久しい昨今ですが、大学として社会の要請に応えながら、未来においてもその存在感を示していくためには、「学生の夢に翼をつけ、夢の実現に向けてより高みへと昇れるよう、羽ばたくお手伝いをする」に尽きると、我々は考えます。そのような若者たちの感動や満足とともに、大学も未来に向けて発展していければ、これに勝る喜びはありません。

東京都市大学では、学生にさまざまな体験や、夢を実現するための力を与える各種取り組みと、これからの人材を育てるにふさわしい未来志向の大学として、教育・研究の充実と環境整備に力を入れています。

90周年、100周年に向けた、大学のあるべき姿を目指して

東京都市大学中長期計画

「アクションプラン2030」始動

ビジョン―目指す大学像

80年を超える専門的実践教育の伝統に加えて、「都市」をキーワードに時代の要請に取り組み、国際都市東京で存在感を示す有数の私大を目指す。

2013

2020 創立90周年（2019年）

2030 創立100周年（2029年）

プロジェクト1 教育の質保証

プロジェクト2 キャンパス教育環境向上

プロジェクト3 ブランド力向上

プロジェクト4 大学運営向上

大学としての特色を活かし、社会に貢献するための4つのプロジェクト

東京都市大学では現在、中長期的な視点から持続的発展を目指していくための中長期計画“東京都市大学アクションプラン2030”を2014年3月に策定し、具体的な取り組みを行っています。

校名変更から2014年度で6年目を迎えた本学では、大学としての特色を活かし、より一層社会に貢献するために、創立90周年（2019年）と創立100周年（2029年）という中長期的視点から、4つのプロジェクト（①教育の質保証プロジェクト、②キャンパス教育環境向上プロジェクト、③ブランド力向上プロジェクト、④大学運営向上プロジェクト）を設定して中長期計画（ロードマップ、施策・事業）を策定したものです。

国際標準を目指した大学としてのスタート

東京都市大学では、アクションプランの中で、2030年に達成すべき大きな目標として、「2030年に世界大学ランキング300位以内」を掲げています。

社会のグローバル化が急速に進む中、国際的にひらかれた大学として、留学などを通じた国際交流の活発化、国際社会の中での存在感の向上を図っていくためには、これまでの日本国内だけを考えた大学運営を見直し、カリキュラムなどもより国際標準に合わせたものへと移行していく必要があります。

本学では、こうした大学の国際標準化を重要な柱と位置づけ、アクションプランの中で強力に推進していきます。

東京都市大学

学生の夢に、翼をつけたい

未来へのあらゆる可能性を示し、
社会で活躍する力を育てる

世界を舞台に活躍する人材を育てる

グローバル教育への取り組み

本学では、グローバル社会で活躍する人材を輩出する重要性を認識し、さまざまな施策を展開しています。卒業までに全員がTOEICの2級を取得できるよう、日常的に英会話に触れられる「毎日学べる英会話」「インターナショナルラウンジ」などの機能を各キャンパスに設置、「都市大スタンダード」として語学教育に力を入れてきました。

しかし語学は、単に意思疎通のためのツールと考え、より文化的な交流を図っていくための教養教育、海外との共同研究事業や国際交流の機会創出に、力を入れています。

海外に学生を派遣し、現地で就業体験をさせる「海外インターンシップ」はすでに多くの実績をあげており、(独)科学技術振興機構の「さくらサイエンスプラン」(P16参照)では、本学提案の企画によりタイ、韓国、中国の大学との共同研究事業を継続的に行っています。今年からは、200名規模で西オーストラリアに留学生を派遣する「東京都市大学オーストラリアプログラム(TAP)も始まり、今後もさまざまな交流の機会を提供していきます。

(左)海外インターンシップ成果発表会、(上)横浜キャンパス・イングリッシュキャンプ

ひろがりゆく連携のネットワーク

都市大グループとの学校間連携から、
地域、企業、他大学、そして社会との連携へ

東京都市大学の最近の大きな特徴として、各方面との積極的な連携が挙げられます。

まず他校にはない特徴的な教育の機会創出のため、都市大グループの強みを活かし、付属各校との学校間連携を行ってきました。人間科学部児童学科と東京都市大学二子幼稚園との連携は、通常では体験できない実践的な教育の機会となっており、他にも高大連携や部活動を通じた交流なども活発に行われています。

本学は東急グループの教育事業の一翼を担っており、その連携により、設備の拡充や企業へのインターンシップ、共同研究事業なども積極的に進めており、大きな強みとなっています。

そのほか、東京大学生産技術研究所や室蘭工業大学との学術連携、早稲田大学との共同原子力専攻など、他大学との連携、各種イベントや研究開発を通じた地域や企業との連携に加え、最近では、日本科学未来館との包括連携協定や、東京2020オリンピック・パラリンピック招致委員会との連携協定、海外の大学との連携なども進められています。

(上)東京都市大学二子幼稚園との幼大連携、(右)東京大学・生産技術研究所との学術連携シンポジウム

教育環境も未来志向へ

これからの大学として、施設の果たす役割は大きい

これからの高度教育・研究を担う大学として、施設・設備の拡充は欠かせないテーマとなります。ここでは、最近新たなランドマークとなる新1号館が完成した世田谷キャンパスを中心に、東京都市大学の教育・研究を支える施設の一部を、ご紹介します。なお、ここではとてもすべてをご紹介することはできませんので、詳しくはウェブサイトの施設紹介（http://www.tcu.ac.jp/facilities/index.html）をご参照ください。

新1号館も完成 世田谷キャンパスの施設拡充

新1号館

（写真上左）4階に新設された教職員ラウンジ「ラウンジ・オーク」時間帯によっては学生も利用できるほか、学会の懇親会や教職員の議論、イベントなどにも活用されています。
（写真上中、右）1階入り口付近には、学生と関係の深い業務を行う事務局が配置され、開放感のある窓口で高い利便性を実現。

正門から見た新1号館の外観。左は旧1号館。

2013年に完成した新1号館は、延床面積約15,000㎡、地下1階、地上4階の、東京都市大学の新しいランドマークとなる施設です。大中小49室の教室群、共通教育を中心とした研究室群、学生支援部門や管理部門の事務機能、教職員ラウンジおよび学生ラウンジを備えた複合施設で、大型太陽光発電や自然採光、自然通風などのエコ設備、また学生が交流や議論を行えるコミュニケーション施設としての機能を数多く備えています。

旧1号館から、6号館前に移されたしだれ桜。

4号館（建築学科棟）

武蔵工業大学創立75周年を機に、2006年に建設された、4号館（建築学科棟）。その建設は、解体した旧図書館の一部を再利用し、敷地周囲の樹木も可能な限り残すなど、新旧一体化した空間として計画されました。

世田谷キャンパス 図書館

キャンパスカード（ICカード）による入退館・施設予約をはじめ、自動貸出機による貸出、館内のどこでもインターネットが利用できるなど、ITを多用した図書館となっています。また今年から、学生が議論しながら学習できる「ラーニングコモンズ」も新設されました。
蔵書は図書27万冊、和洋雑誌約3,000タイトル。

2号館

旧建築学科棟の跡地には、工学部医用工学科等の研究棟などを擁する新2号館が建設されました。地下1階、地上4階から構成され、地下1階は、機器分析室や化学処理室、1、2階に教室、3階に実験室、4階は研究室などが配置されています。
写真下は、工学部としては珍しい本格的手術室を備えた「臨床実験室」。

SAKURA CENTER#14

体育館、学生食堂、売店を一体化した、世田谷キャンパスの中核をなす複合施設。学生食堂やカフェテリアは地域の方々にもご利用いただき、大学と地域の交流において役立っています。
計画・設計から完成に至るまで、教職員と学生が積極的に参加し、旧体育館のフローリングを新食堂の床材に再利用するなど、環境への配慮が高く評価されています。体育館の収容人数2,700名、食堂席数1,000席。

横浜、等々力キャンパス、他の施設もより充実

人間科学部児童学科 スタジオシアター
（等々力キャンパス）

ワークショップと本格的な演劇やダンス公演ができる多目的スタジオ。
児童学科の身体に関わる授業で主に使用します。

都市生活学部 プロジェクトスタジオ
（等々力キャンパス）

学びの集大成である卒業研究に取り組むため、ハイスペックなコンピュータやディスカッションするためのミーティングスペースが設置されています。

環境学部 環境実験・演習室
（横浜キャンパス）

さまざまな実験や実習ができる演習室。先進の機器類に加え、データを解析するためのパソコン類も充実しており、計測から分析、評価までをまとめて行えます。

総合研究所
（等々力キャンパス）

450㎡の大型クリーンルームなど、高度な機器を用い、社会的ニーズの高い先端的研究を行います。現在はＩＣＴの省エネルギー化に寄与する光電子融合デバイス、社会インフラの再生技術の研究が主に行われています。

都市大グループ 総合グラウンド

都市大グループ各校が、共同で利用する「総合グラウンド」。昨年は大規模修繕工事が行われ、安全に配慮した改善がなされるとともに、多目的グラウンドもスクールカラーになりました。ここでは、各系列校の対抗試合なども行われています。

演習室
（横浜キャンパス）

授業、ゼミ、ワークショップなど多用途に使える施設。教室のキーワードは、“プレイフルラーニング（楽しみに満ちた学びの実践）”。可動式のテーブルは授業の形態に応じて瞬時にスタイルを変えることができます。

社会にひらかれた大学を目指して

進む地域・社会との連携

東京都市大学の教育の特徴的な一面として、さまざまな連携協定をもとにした学生の体験活動を支援する取り組みがあります。ここでは、その中から特徴的なもの、また最近のものを中心に、ごく一部ですがご紹介します。

日本科学未来館との包括連携協定を締結

東京都市大学と日本科学未来館（館長：毛利衛）は、相互交流による両者の啓発と地域社会への貢献、一般を対象とした科学コミュニケーションの推進を目的とした包括連携協定を締結し、昨年4月16日に、調印記念式典を開催しました。

今回、日本科学未来館との包括連携が締結されたことを受け、①都市大生が科学未来館にて展示説明や研究支援等の学生ボランティア活動を行う場合、単位として認定（要件を満たした場合による）、②都市大にて開催する「科学体験教室」へ科学未来館が参加、③科学未来館の科学コミュニケーターが本学の講義へ参加、などの取り組みが予定されています。

これまでも本学は、学生がボランティアを通じて社会に貢献する場を積極的に提供してきましたが、最先端科学を通じて、社会との交流を体験する上で、日本を代表する科学博物館「日本科学未来館」は最高の舞台といえるでしょう。

特に最近は、就職活動において企業が学生に求める要件として「コミュニケーション能力」、「主体性」、「挑戦する力」がよく挙げられており、学生達がそれら能力を磨く上で、こうしたボランティア活動は大きな役割を果たしています。

（写真上）包括連携協定の調印式における、北澤宏一・東京都市大学前学長（左）と、毛利衛・日本科学未来館館長
（写真下）調印後、学生たちに囲まれて

オリンピック・パラリンピック大学連携協定

2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会の成功に向け、本学を含む全国552大学・短大が、同大会組織委員会と連携協定を締結しました。

各都道府県に1校以上の連携大学が配置され、まさしくオールジャパンでの取り組みとなりました。今回の連携により、それぞれの資源を活用してオリンピック教育の推進や大会機運の醸成等の取り組みが図られます。

（写真上）昨年6月、早稲田大学大隈記念講堂で開催された締結式の様子（写真右上）大会組織委員長 森喜朗氏の挨拶（写真右下）協定書

＼学生が自主的に取り組む／
被災地ボランティア「TAKE ACTION!」

東京都市大学の学生団体が自主的に行っている、東日本大震災　被災地でのボランティア活動「TAKE ACTION!」。震災の発生した2011年夏には、NPO法人「遠野まごころネット」に参加する形で、35名の学生が現地でのガレキ撤去や、被災地の子供達のケアなどを行いました。

バスの使用料・レンタカー代・燃料費・高速料金などを東京都市大学と東京都市大学後援会が支援したことで、今まで参加したくても一歩を踏み出せずにいた学生も、参加することができました。

地域とのつながり

世田谷キャンパスの地元、尾山台商店街との交流

東京都市大学では、教員及び学生らの研究活動を通じた地域との交流が積極的に行われています。

特に世田谷キャンパスのある、尾山台商栄会商店街との連携は盛んで、工学部建築学科・小林茂雄研究室と商店街との協働連携による、光により街の活性化を図る「温個灯新（おんこちしん）2012」や、昨年10月には「第27回尾山台フェスティバル」での科学体験教室なども開催しました。

（左）小林茂雄研究室による「温個灯新」（右）「科学体験教室」の様子

子育て支援に取り組む自治体、社会福祉法人との連携

実践力と専門性を備えた保育士の養成を図る人間科学部では、子育て支援に取り組む自治体や社会福祉法人との連携を積極的に進めています。2012年3月には、都筑区および都筑区内に認可保育園を設置する12社会福祉法人と、また2014年12月には、横浜市幼稚園協会と連携・協力協定を締結しました。これにより、インターンシップやボランティアなど活動場所の拡大、また幼児教育学や児童学に関する調査研究の促進が期待されます。

（左）都筑区および12社会福祉法人との連携（右）横浜市幼稚園協会との連携

本学を中心に、8大学の学生が、地域活性化、多世代共生を図る「しんゆりマルシェ」

東京都市大学、駒沢女子大学、昭和音楽大学、専修大学、田園調布学園大学、東海大学、日本映画大学、明治大学の学生が、地域まちづくり団体とパートナーシップを組み、地域活性化と多世代共生を図る「しんゆりマルシェ」が昨年10月に開催されました。

これは都市生活学部・平本一雄教授を総合プロデューサーに、8大学100名以上の学生が携わる、大学生と地域との新たな協働モデル。都市大生の発案から生まれた企画です。

当日、人間科学部が出展した「パラソルアートワークショップ」の様子

企業・海外とのつながり

海外での就業体験を実現「海外インターンシップ」

東京都市大学のグローバル化に向けた特徴的な活動の一つに、「海外インターンシップ」があります。昨年はフィリピン、タイ、アメリカなど5か国7企業に、23名の生徒が参加し、通常では体験できない、約2週間の貴重な就業体験を行いました。参加者も年々増加しており、最近では、成果発表会も英語で発表されるようになりました。

また、東急グループに所属する大学というメリットを活かした、「東急グループインターンシップ」も積極的に行われており、こちらも昨年は22社に79名が参加しました。

都市事業の次世代技術で東急不動産と産学連携

研究室レベルで多数行われる産学共同研究ですが、一例として東急不動産グループとは、次世代クラウド型のHEMS（住宅向けエネルギー管理システム）の実効性検証や、住宅の環境性能向上などについて、継続的な連携事業を行っています。その一環として2013年11月には、フラウンホーファー建築物理研究所のダニエル・チルケルバッハ氏（写真左）、田中絵梨氏（右）を講師に、特別講演会も行われました。

東京都市大学オーストラリアプログラム（TAP）

都市大の伝統である、実践的な専門力を有した国際人を育成する

西オーストラリアでの本格的留学プログラム、始動

単なる語学留学にとどまらない多様な文化との交流の機会を

急速にグローバル化が加速する現代社会の中で、産業界などからの強い要請もあり、国際社会で活躍する人材の育成が急務となっています。大学としてもこうした社会の変化に対応し、学生たちにグローバル化する社会で生き抜く力を身に付けさせるのみならず、すぐれた国際的視野とコミュニケーション能力で、国際社会でのリーダーシップを発揮しうる人材を輩出することが、その責務だと言えるでしょう。

そうした中、本学が推し進める「東京都市大学国際人材育成プログラム」の一つとして、国際的な視野とコミュニケーション能力を持った、時代に柔軟に対応できる人材育成を目的とする「東京都市大学オーストラリアプログラム（略称：TAP）」が2015年度より開始されます。

このプログラムは、西オーストラリア州パースのエディスコーワン大学（略称：ECU）と協定を結び、1年次の準備教育（国内）と2年次5ヶ月間の留学を合わせた、2年にわたる本格的な留学プログラムを実施するというもの。派遣期間をサイクルA（2月～6月）とサイクルB（8月～12月）のそれぞれ5ヶ月間に分け、1サイク

西オーストラリア州政府から使用を許された、政府公認のロゴ。受け入れ側からの手厚いバックアップも、このプロジェクトを支えています。

現地での授業の様子。さまざまな国籍の学生と一つの教室で学ぶ授業は、
国際交流を学ぶ上ではまたとない機会となるでしょう。（上）
留学先のエディスコーワン大学のキャンパス（右上、右中央）と、パース沖合のロットネスト島（右下）

ル約100名、年間約200名を派遣するプログラムです。

留学先の西オーストラリア州は、アジア、ヨーロッパ、アフリカ、中東などさまざまな国の出身者が暮らす、多様性に富んだ州として知られており、単なる語学留学だけにとどまらず、これからの国際人に必要とされる、多様な文化に触れ、その中で相手を理解したり、自らを表現する方法を学ぶコミュニケーションの場として最適な環境であると期待されています。

留学中は本学とECUが共同開発した科目を受講します。英語の科目が5科目13単位、教養の科目も4科目8単位まで取得でき、英語の能力が高ければ、さらにECUで開講する科目についても単位の取得が可能です。

現在は工学部全8学科、環境学部環境創生学科、メディア情報学部社会メディア学科、都市生活学部都市生活学科の学生が参加する予定です。

各種グローバル教育、海外インターンシップなどでも大きな成果

これまでにも本学では、グローバル化を推進する活動の一例として、まず教育課程では「都市大スタンダード」として全学部共通の英語科目を設置、そのほかにネイティブスピーカーによる課外講座の開講、Skypeを使った「オンライン英会話」、学内でのTOEIC® IPテストの提供などをすでに行っています。また、海外の有力企業にて、実際に就業体験を行うことができる「海外インターンシップ」の充実にも力を入れ、国際的人を目指す上での大変貴重な機会として、大きな成果を挙げてきました。

今後は、こうしたグローバル化に向けた活動を在学生・留学生・教職員のみならず、卒業生や都市大を志望する高校生、社会人や地域、一般社会の方々までも対象とした幅広いものにしていくとともに、これら一連の活動を有機的に結びつけ相乗的な効果を生み出しながら、東京都市大学のグローバル教育の充実を図っていきたいと考えています。

エディスコーワン大学と、西オーストラリア州パース

西オーストラリア州パースは、日本との時差が1時間、気候も温暖な、約150万人が暮らす都市。街の中心街は近代的なビルが建ち並ぶ一方、透き通ったビーチを有するなど、豊かな自然と現代的な景観とが調和した日本人にも暮らしやすい環境です。また海外出身者が人口の30％を占める、オーストラリアでも特に多様性に富んだ土地柄として知られており、ECUも、世界104か国から約3,600人の留学生が学ぶ国際色豊かな大学です。なおパースには日本人が多くないので、英語を集中して学ぶには最適の地と言えるでしょう。

パース市内の様子

Professional

最先端研究
いま、
この研究室が
熱い！

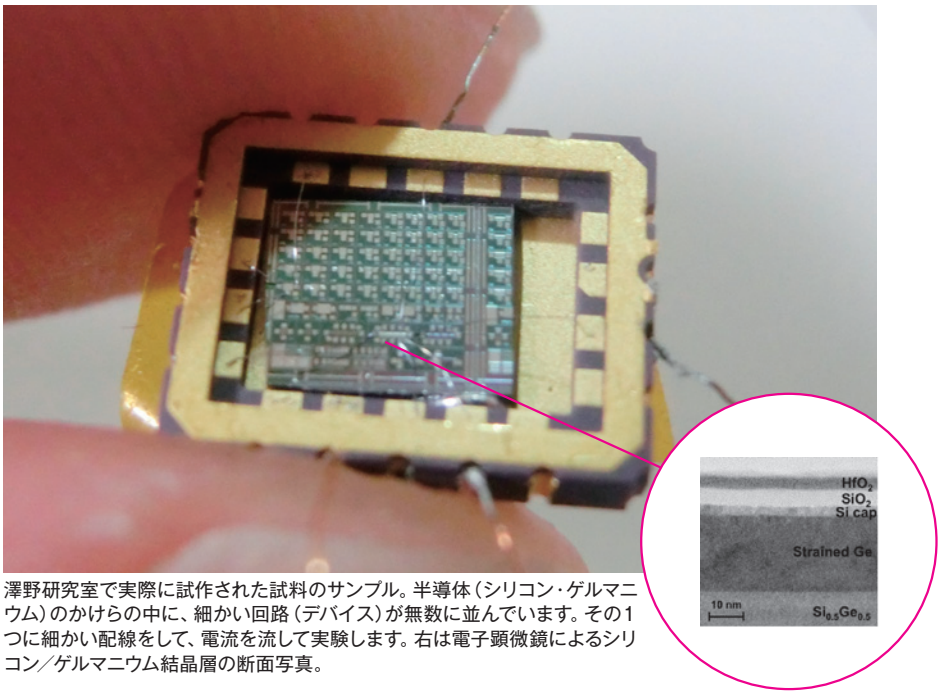
Profile
澤野 憲太郎（さわの けんたろう）

2005年、東京大学大学院工学系研究科・物理工学専攻　博士課程修了。同年より武蔵工業大学・助手。2008年より東京都市大学（旧武蔵工業大学）講師。2011年、ミュンヘン工科大学・客員研究員。2012年より東京都市大学・准教授として現在に至る。

エレクトロニクスの進歩が止まる!?
半導体成長の物理的限界に、若き研究者が挑む

――難易度高い「ゲルマニウム―シリコン」半導体で、微細化に頼らない性能向上を実現――

工学部電気電子工学科 准教授　**澤野 憲太郎** 工学博士



澤野研究室で実際に試作された試料のサンプル。半導体（シリコン・ゲルマニウム）のかけらの中に、細かい回路（デバイス）が無数に並んでいます。その1つに細かい配線をして、電流を流して実験します。右は電子顕微鏡によるシリコン／ゲルマニウム結晶層の断面写真。

私たちの生活を支えるエレクトロニクスは、より高速に、より高機能に、まさに「飛躍的」といえる成長を遂げてきました。しかしこうした成長が限界を迎える危機が、実は目前に迫っていることを、皆さんは知っていましたか？

そうした半導体進歩の停滞という問題に立ち向かう研究で、国内外から大きな注目を集めているのが、澤野憲太郎先生の研究室です。

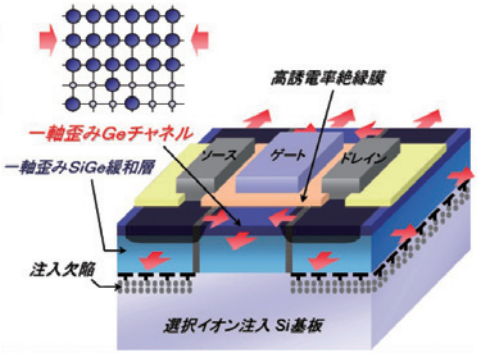
半導体の微細化は、「これ以上小さくできない」レベルに

LSIなどの半導体集積回路は、ある面積の基板（チップ）上に、スイッチのような素子や回路が無数に並んだ構造をしています。最近では一つのチップ上に並ぶ素子は100億個に達するものもあるとか。こうした素子や回路をできるだけ小さく作り、より多く載せる（集積する）ことで、これまで半導体集積回路は飛躍的な性能向上を果たしてきました。

しかしこうした素子や回路は、まもなく原子の個数を数えられるほどのサイズにまで微細化が進みつつあります。そこまで小さくなると、本来流れるべきではないところに電流が流れ誤作動したり、作る方法がなくなるなど、物理的な限界を迎え、成長も止まってしまいます。しかし今やあらゆる産業のベースとなる半導体の進歩が止まることは、全産業の進歩も止まりかねません。そこで世

この研究では、半導体材料の結晶を成長させる「シリコン分子線エピタキシー（MBE）装置」（写真）で、とにかくよい試料を作ることが、成功のカギを握ります。そのため、メンテナンス作業も学生総動員で行われます。

クリーンルームでの作業の様子。都市大総合研究所には、450㎡の広さを持つ、クリーンルームが完備されています。



シリコンの基板上に、ゲルマニウムをなじませる層を形成し、その上にさらに電子を通しやすいシリコン／ゲルマニウムの層をつくる澤野研究室の保有技術。左上の図のように、小さい原子のシリコン（Si）の中に、大きな原子のゲルマニウム（Ge）を結晶化させ入れ込むことで、電子がうまく流れる歪み状態をつくります。

都市大総合研究所の丸泉所長、研究室の皆さんと。澤野研究室では現在、総合研究所の丸泉所長、徐学俊博士研究員とともに、LSIの高速演算処理のための光伝送を支える、ゲルマニウム量子ドットによる発光デバイスの開発も行っており、こちらも産業界から注目を集めています。

界中の多くの研究者が、微細化に頼らない半導体の性能向上の方法を研究しています。

これからの半導体の進歩を支える決定打をめざして

半導体を通る電子のスピードは、基板となる材料（通常はシリコン）の原子配列を、広げたり狭めたりという「結晶歪（ひず）み」を意図的に作ってやることで変化すると、最近の研究から分かってきました。つまり、電子がよく流れるような状態に、歪みをうまく作ってやれば、半導体の性能は飛躍的に向上するはずです。そこで澤野研究室では、独自の結晶化技術を駆使して、規則的に並ぶシリコンの原子配列に、シリコンより原子サイズの大きな「ゲルマニウム（Ge）」を結晶化させ入れ込むことで、原子の並びを意図的に変化させ、最適な歪みを人工的に作ろうとしています。

微細化に頼らず半導体の性能を上げる方法には、今のところは決定打といえるものはなく、新しく生まれる技術も、残念ながら一時しのぎにすぎないような現状があります。その中でゲルマニウムを利用した研究は、最低10年は安定的な進歩を続けていける決定打として、大きな期待が持たれてきました。

とはいえ、シリコン基板上にゲルマニウムを添加して、高品質な基板として機能させることは大変難しく、シリコンとゲルマニウムの結合した結晶膜を何層も重ねて段階的になじませたり、うまく機能する層を基板表面に集中的に作る技術の開発が必要となりますが、その分野で澤野先生は大きな強みを持っています。

より使いやすく、安全な材料へのこだわり

また、単に電子のスピードを上げるだけなら、「ガリウムひ素（GaAs）」など他の半導体を使う方法もありますが、ひ素を含むため人体への悪影響が懸念され、また資源の量も少ないため、工業材料としては大きな問題があります。そこで安全で安価、性質も安定しており豊富に存在する材料は何かというと、これまでも半導体として長く使われてきた「シリコン」が圧倒的に有利。ですから澤野先生は、シリコンに何か相性の良い別の材料を微量加える方法に、常にこだわっています。

こうした研究内容が、この分野で実用性の高い研究と注目を集め、国の研究開発事業の中でも高い評価を得ています。

今年3月、東京都市大学図書館の地下に完成した「ラーニングコモンズ」

工学部建築学科 2009年卒業
松島 咲季子さん
㈱イトーキ
営業本部ソリューション開発統括部
R&D戦略企画部
教育・健康市場開発室 プランナー

「友達との議論はネットで」という若者たちに仲間と直接話すことの大切さを伝えたい

**大学時代の経験を活かし、
東京都市大学「ラーニングコモンズ」をコンセプトから設計**

「人と話す」ことから学んだ体験を、これからの人たちにも

家具メーカー、イトーキに勤務する私が現在手掛けているのは、東京都市大学の世田谷キャンパス図書館に新しく完成する「ラーニングコモンズ」という空間です。人は何かを考える時に、誰かと語らい意見を共有し合う時間、また一人で没頭する時間の両方を必要としています。そうした、「語らい、没頭、実践」という、一見すると相反するような時間と場を提供するのが、このラーニングコモンズです。私は建築学科の手塚研究室で設計を学びましたが、建築学科とは不思議なところ。いつも部屋には誰かがいるから、まるで目標に向かって共同生活をしているような雰囲気なんです。今でも先輩や仲間とは家族同然のつながりですが、私もそんな環境の中で、閃きが来ない時には誰かと話してみる、ということを繰り返していたのだなと、今になって思います。

今の学生さんからは、「ディスカッションは主にLINEで」、という話も聞いていますが、私は大学時代、実際に人と対面して話をする中で、大変多くのことを学んできました。ぜひ今の学生さんにもそんな体験を共有してもらいながら、考える力、違う価値観の人を許容する力、最終的にそれを誰かに伝える力などを、養って欲しいと考えています。

多様化する教育の空間作りに、企画段階から加わる夢を実現

大学を卒業してから、まもなく7年目に入ります。もともとは、誰かのコンセプトに合わせて図面を引く仕事だったのですが、今年の1月からはさらに前段階の、企画立案から携われる部門に移ることができました。

最近は教室なども、より能動的、主体的に授業を受ける空間に変わってきており、要求も多様化、高度化していますから、より一段深いところから、ニーズに対して作りこみができる今の仕事は、やりがいもひとしお。もちろん完成後に全然意図したような使い方がされなかった、という失敗もありますが、そんな経験から「最初から作りこみすぎず、状況に合わせて調整していく」といった工夫も、自然と身についてきました。

そういう意味では、今は自分にとっては“夢がかなった”というより、“夢の入口にようやく立てた”というところ。今後は自分のやってみたいことを、周りの人に共感してもらえるような人間力を磨きながら、さらにやりがいのある仕事に挑戦したいと考えています。

学生時代の一枚
（2008年・前列中央が本人）

EVENT Report

おかえりなさい 懐かしの母校へ!! ホームカミングデー開催

――懐かしい仲間たちとの再会に感動！ 大いに盛り上がった3日間

東京都市大学の卒業生や退職教職員が集まって、懐かしい仲間や恩師との旧交を温めるホームカミングデーは、平成25年度までは年一回、世田谷キャンパスにて合同で開催されていましたが、昨年は横浜、世田谷、等々力の各キャンパスごとに開催されました。

横浜キャンパスでは横浜祭にあわせ6月7日、卒業生45名の参加で教職員とともに講演と懇談を楽しみました。等々力キャンパスでは等々力祭にあわせ11月1日、卒業生72人が参加、退職･現職教職員と懇談しました。世田谷キャンパスでは世田谷祭にあわせて11月2日、卒業後40年を超える102名を含めて190名の卒業生が参加。新築の1号館などを見学した後、退職･現職の教職員とともに、在学生の吹奏楽演奏や都市大等々力中高の舞チア部によるパフォーマンスを楽しみました。

ホームカミングデーは今年も開催されます。多くの卒業生の方々の参加をお待ちしています。

世田谷キャンパス（11月2日開催）

世田谷キャンパスでの開催の様子。本学吹奏楽部によるジャズの生演奏や、グループ校である東京都市大学等々力中高の舞チア部によるパフォーマンスなどが披露され、会場を盛り上げた。

等々力キャンパス（11月1日開催）

等々力キャンパスの開催の様子。懐かしい顔ぶれに、時間を忘れて会話に花が咲く楽しいひと時となった。

横浜キャンパス（6月7日開催）

横浜キャンパスでの開催日には、涌井史郎教授、吉田国子教授による特別講義も行われた。

「都市大の歴史と五島慶太翁の功績」を紹介する歴史展示コーナーが開設

―解説パネルやゆかりの品、慶太翁の生家実測模型などを展示―

1月30日（金）に、武蔵高等工科学校、東横商業女学校の創立以来の歴史と、現在の東京都市大学への発展の経緯をビジュアルに紹介した展示コーナーが、都市大世田谷キャンパスの五島記念館エントランスに開設されました。展示は、都市大の歴史をたどるコーナーと、都市大グループの祖である五島慶太翁の生涯と功績を紹介したコーナーから成り立っています。

創立者の建学の精神、五島慶太翁が武蔵工大の発展に寄与したいきさつ、当代随一の事業家であった五島慶太翁が教育にかけた情熱などを、パネルやゆかりの品、五島記念館や慶太翁生家の模型（写真右下）などで紹介しています。

新しく開設された展示コーナーの様子と、勝又教授の研究室による慶太翁の生家模型（右下）

その中でも特に会場の注目を集めたのが、五島慶太翁生家の実物模型です。これは、工学部建築学科の勝又英明教授（本学工学部建築学科 昭和55年卒）と研究室の学生たちにより制作されたもの。本研究は、五島慶太翁の生誕地、長野県・青木村に現存する歴史的意義の高い建築物「慶太翁の生家」を、現時点で実測のうえ図面化し、その図面をもとに模型化するというもので、後世に伝える事業としても大変意義深いものです。研究は青木村の北村政夫村長以下、関係者の方々の協力を得ながら進められ、調査結果および模型が完成、今回の展示へとつながりました。

海外の大学と交流を深める「さくらサイエンスプラン」

―本学の提案が採用され実施へ！マレーシア、韓国、中国の学生と共同研究―

独立行政法人科学技術振興機構（JST）が企画する「日本・アジア青少年サイエンス交流事業」（さくらサイエンスプラン）第1回募集（昨年5月23日締切）、第2回公募（昨年7月18日締切）、第3回公募（昨年12月4日締切）において、全国の約600件の応募の中から、それぞれ本学の取り組み計画が採択されました。これにより本学は、第1回で1件、第2回で3件、第3回で1件の計5件の計画が採択されました。

さくらサイエンスプランは、「産学官の緊密な連携により、優秀なアジアの青少年が日本を短期に訪問し、未来を担うアジアと日本の青少年が科学技術の分野で交流を深めることで、日本の最先端の科学技術への関心を高め、日本の大学・研究機関や企業が必要とする海外からの優秀な人材の獲得に貢献することを目的」とするものです。

これにより、昨年10月～今年1月にかけ、韓国・江原大学校、マレーシア日本国際工科院、中国・大連交通大学、タイ・タマサート大学、タイ・モンクット王工科大学トンブリー校からそれぞれ学生が10日間の日程で本学を訪問し、キャンパスツアーやラボツアー、日本科学未来館の見学のほか、本学学生と共同での課題研究、交流成果発表会などを行いました。

「さくらサイエンスプラン」における交流の様子。共同での課題研究やラボツアーが行われました。

平成26年度学位授与式を挙行

―博士5名、修士258名、学士1535名が誕生―

3月19日(木)東京都市大学世田谷キャンパスにおいて、平成26年度の大学院学位授与式が午前9時30分より、学部学位授与式が午前10時45分よりそれぞれ挙行されました。式典は大学院修了者、学部卒業者はもとより、来賓、教職員、保護者の出席のもと、晴れやかな中にも厳粛に行なわれました

大学院学位授与式では博士後期課程修了者3名、学位論文提出による博士2名、博士前期課程修了者258名に学位記が授与され、学術研究賞が1名、研究科長賞が2名に授与されました。

学部学位授与式では、工学部、知識工学部、環境情報学部、都市生活学部、人間科学部の卒業者合計1535名に卒業証書･学位記が授与され、学業や課外活動で優れた成績を修めた学生を表彰する「学術優秀賞」「理事長賞」「山田奨学基金賞」「校友会賞」「後援会長賞」の各賞受賞者に、賞状と記念品が授与されました。

三木学長は「わが国は科学技術の進展で国を築いてきた。グローバルの時代。世界が時間的にも距離的にも急速な勢いで変化している中で、諸君はどのようにすれば世界に貢献できるか？大切なのは心技体。中でも心が原動力。心を一にすれば物事を動かすことができる。世界が皆さんの活躍を期待している。夢に翼をつけて飛び立って欲しい」との式辞を述べ、卒業生を励ましました。

大学院学位授与式では、卒業生で、現在ボーズ株式会社代表取締役社長の挽野元氏から来賓祝辞をいただきました。学部学位授与式では学校法人五島育英会の安達功理事長から挨拶があり、その後、校友会の松下正勝会長から来賓祝辞をいただきました。

学部学位授与式（上）
大学院学位授与式（左下）
三木学長式辞（右下）

武蔵工業大学時代に愛用されていた「ミットバード」を覚えていますか？

本学の前身である武蔵工業大学時代に愛用されていた「ミットバード」をご存知ですか？80年代から90年代にかけて、Tシャツやマグカップ、ワッペンなどへ商品化され、学園祭では着ぐるみが登場するなど、マスコットキャラクターとして愛されてきました。その後、海外の大学略称の商標登録の関係等から、積極的に使われる機会が徐々に減り、現状では休眠状態です。

当時、大学のマスコットキャラクター開発は、非常に先進的であったことや、上昇を目指す本学の姿を「天高く飛ぶひばり」に象徴した秀逸なデザイン、現在のスクールカラー（都市大ブルー）に通じるボディの青色から、「過去と現在」を繋ぐ大切な存在として復刻に値するものではないかと考えています。

現在、このキャラクターにまつわるエピソードや過去の資料やグッズなどを探索中です。併せて、デザイン決定の経緯や制作者に関する情報も調査中です。ご存知の方がいらっしゃいましたら、ぜひ情報をご提供ください。（詳しくはウェブサイトへ http://goo.gl/F6sJEE）

ウェブサイトのQRコード

●情報ご提供先メールアドレス：senryaku2030@tcu.ac.jp
●お問い合わせ先電話番号：☎03-5707-0104　東京都市大学企画室（担当：濱田）

挑戦者たち Challenge TCU

試合の様子（2012年 全国空手道選手権大会）

ロシア大会 優勝（2014年）

東京都市大学空手道部

全国大会2連覇達成！ ロシア大会をも制す

“無理のない自分流”で、廃部の危機から一躍強豪校へ

部の運営を学生が考える「コーチングスタイル」で、メリハリの効いた練習を実践

納会にて行われたOBと合同練習（2014年12月）

流派	松濤館流
所属連盟	國際松濤館空手道連盟、関東学生空手道連盟（1部リーグ）
創部	1951（昭和26）年4月
部員	16名（男子13、女子3）

「押忍！」まだ少し肌寒い道場に、練習開始の挨拶が響きます。今回訪れた東京都市大学空手道部は、一見すると小柄な部員が多い、そんな印象を受ける部ですが、ここ数年の彼らの勢いは、とどまるところを知りません。

2013年度、2014年度には、所属する流派「國際松濤館空手道連盟」主催の「全国空手道選手権大会」において、団体戦で見事優勝、大会2連覇を成し遂げました。のみならず、その優勝が縁で招待された、日露青年交流事業の松濤館空手道全ロシア大会においても優勝し、日本の空手の底力を世界に示しました。

また関東大学空手道選手権大会では、2012年に団体戦を勝ち抜き、部として40年ぶりとなる全国大会出場を達成、現在も強豪ひしめく1部リーグの中で、毎年熱戦を繰り広げています。

廃部寸前から奇跡の復活 学生主導の部活運営へ

今でこそ、このように活躍する空手道部ですが、数年前には部員数がたったの1人にまで減少、誰もが廃部を覚悟した時期もあったそうです。当時、同部OBでもある経営システム工

見守るように

コーチの薩川宣昭先生（左：経営システム工学科、空手道部OB）と、師範の金澤文敏先生（右：國際松濤館空手道連盟 本部指導員）。団体戦で勝つために、全体的なメンバーのレベルアップと、部員の人数維持が目下の課題。対策はもちろん学生と一緒に考えます。

大和なでしこ

実力で男子を圧倒!?の女子メンバー。左から、安部実菜さん、松本芳佳さん、山田実紅さん。

台湾合宿

異文化の中に身を置き、メンタル面を強化するため、流派の台湾支部で行う夏合宿の様子。日本に学び、追い越そうという台湾選手の必死な様子にも、学ぶところがあったようです。

「日本の全国大会の優勝者が来るというので、少しプレッシャーもありました」（松本芳佳さん）、「会話はほとんど英語ですが、同じ空手をやっていることで、何か通じるものがありました」（山田実紅さん）、「技や練習の仕方にもだいぶ違うところがあり、いい勉強になりました」（安部実菜さん）。

厳しい練習の後には、楽しいひとときも。「参加も二回目なので、久しぶりの再会などもあり、国際交流という面でも印象深かったですね」（櫻井健汰君）、「流派の道場なので、子供もいたりして、いろいろな世代の方と交流ができました」（坪井宏樹君）

初心者からでも

左から、坪井宏樹君、池内岳仁君、内田大貴君、櫻井健汰君。初心者でも気軽に中に入って、一緒にレベルアップできること、縦横のつながりが非常に強いのが同部の魅力だとのこと。

目標を意識

前主将の保屋野大樹君。「先輩に言われるから」ではなく、各自がチームの目標を意識していることが、皆で頑張れる原動力になっているそうです。

学科の薩川先生がコーチに就任、改革に乗り出しましたが、前途は多難でした。「空手というと、厳しい練習や部の伝統といったイメージが強い武道ですが、今の時代、そういったものは学生に馴染みにくいものがあります。もちろんOBの中には、かつての伝統や厳しさを大切にする思いは大変根強くありましたが、今はまずそこから見直さなければ、すでに部はなくなっていたでしょう」（薩川先生）。

そこで、まずは所属流派の連盟や、強い空手道部を擁する系列校の協力を得て少しずつ部員を増やしつつ、日々の練習メニューや部の運営は学生に任せる、完全なコーチングスタイルへと移行することにしました。これは薩川先生の専門分野、プロジェクトマネジメントのノウハウによるものですが、かつてのような一方的な指導ではなく、現実的に限られた時間を有効に使い、学生たちが納得できる形で練習をさせよう、というわけです。理系の学生でも無理なく参加できるメリハリが効いた練習と、PDCAサイクルで常に改善しながら進めていく練習は、日々忙しく研究に追われる学生にも受け入れられ、だんだんとその中に浸透していきました。

伝統をめぐる衝突を経て世代を超えた交流が生まれる

部内もこのような状況ですから、大学連盟のリーグも言うまでもなく、当初は2部の最下位からのスタート。5人制の試合に4人で出場していたこともありました。しかし徐々にメンバーが増え、部活運営に対する学生間の議論も活発化してくると、参加意識の高い選手も育ち、2部で優勝、そして1部リーグへと徐々に成績も上がっていきました。

過去の伝統とあまりに異なる改革に、厳しく反発していたOBも、今は徐々に理解を示してくれるようになりました。毎年出場する大会ではOBが監督を務めていますし、国内で行われる春の合宿では、道場付きの宿泊施設を経営するOBが、何かと面倒を見てくれます。この春合宿では最終日に在校生とOBが交流試合を行い、終了後は世代を越えて懇親を楽しむといったことも行われています。

このように、一度は途切れかけた空手道部の伝統は、より時代に即した新しい形に姿を変え、ここからまた新しい伝統を紡ぎ出そうとしています。

主将
内田 大貴君
（環境創生学科 3年）

自分たちなりのやり方で

自分も厳しくつらいのは苦手なので、自分たちでメニューを作り、楽しみながら初心者も経験者も自然とレベルアップできるのは理想形です。

同じリーグには、必ず一人はナショナルチームの選手がいたり、オリンピックに出ようかというチームもありますが、その人たちと同じ土俵で、自分たちなりのやり方で全国大会に出たりということができているのは、非常に良いことだと思いますね。

創部7年目の女子バレーボール部は、早くも春高バレー常連校に。昨年は全国第3位に輝きました

（東京都市大学塩尻高等学校）

野球、女子バレー、サッカー部が大躍進 スポーツで全国区に躍り出た都市大塩尻高

東京都市大学塩尻高等学校では、文武両道をモットーに、全国大会への出場など、部活動でも輝かしい成績を収めてきました。2011年には、野球部が悲願の甲子園出場を果たし、女子バレーボール部やサッカー部、空手道部なども全国大会の常連校となっております。

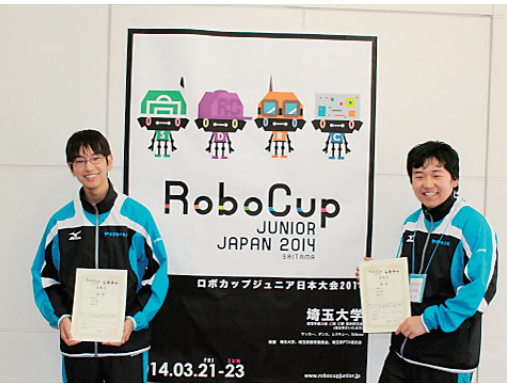
今年度も昨年12月から今年1年にかけて、女子バレーボール部とサッカー部が、そろって全国出場を果たしました。

女子バレーボール部は第67回全日本バレーボール高等学校選手権大会（通称：春高バレー）に4年連続4回目の出場。一昨年には同大会で全国ベスト16、そして昨年はなんと全国3位と大変な飛躍を遂げております。

またサッカー部も、攻撃的なサッカーで長野県大会を制し、第93回全国高校サッカー選手権大会に、3年ぶり3回目となる出場を果たし、都市大グループ各校に明るい話題を届けることができました。

残念ながら、どちらも全国大会では接戦を制することはできず、ともに初戦突破となりませんでしたが、全国の中でその存在感がますます高まりつつある都市大塩尻高校。今後のさらなる活躍にぜひご期待ください。

サッカー部は3年ぶり3回目の全国大会。山口県の強豪、高川学園を相手に積極的な試合を展開



日本大会で優勝したときの竹間義明君（左）と佐藤潤一君（右）

（東京都市大学付属高等学校）

都市大付属高の2年生コンビ ロボカップ世界大会の2部門で準優勝！

東京都市大学付属高等学校の2年生、竹間義明君と佐藤潤一君によるチーム「花鳥風月」は、ブラジルで行われた「ロボカップ2014世界大会」に出場し、レスキューB競技部門の2部門で、準優勝に輝きました。

レスキューB競技とは、1マス30㎝×30㎝のマスが迷路のようにつながっているコースを、ロボットが自ら動き回り、ヒーターを発見するという競技です。迷路は被災した土地、ヒーターは被災者に見立てたレスキュー競技で、迷路内には様々なトラップが用意されています。

中1から5年連続で世界大会に出場している竹間君と昨年からの強力なパートナー佐藤君がコンビを組み、二人の息の合った活躍に期待が集まっていました。

埼玉大学で行われた日本大会では「花鳥風月」のロボットはそれらトラップをものともせず、3回の競技中2回ですべてのヒーターを発見し、見事優勝を飾りました。

ブラジルの世界大会では、各国から出場してきたチームと5日間にわたり熱戦を展開、国際舞台でも憶することなく協力し、強いチームワークが今回の成績へとつながりました。

2人で作ったロボット

東京都市大学は、付属校である付属中学校・高等学校、等々力中学校・高等学校、塩尻高等学校、付属小学校、二子幼稚園と「東京都市大学グループ」を形成しています。
ここでは、そうした各校の最近のトピックスを、ご紹介します。

「ミクニン」の愛称と楽しい語り口で、三國シェフの授業は子供たちに大人気

ダシの授業では、子供たちが自ら鰹節を削り、味わってみます

（東京都市大学付属小学校）

あのフランス料理の大家、三國清三シェフが付属小で食育の授業

東京都市大学付属小学校では、2011年4月より現在まで、世界的なフランス料理家であるシェフ三國清三氏による食育プログラム（授業）が小学4年生を対象に行われています。

昨今、幼少期からの食育、および幸せな食事体験の重要性が叫ばれていますが、簡単な菜園づくりや、調理実習だけに終わってしまう食育も少なくないのが実態です。この食育プログラムは、本当の意味で充実し、子供たちの心に残る食育教育を行いたいという、三國シェフと同校のそれぞれの思いから実現しました。4年生の授業カリキュラムに取り入れ、その総合監修ならびに講師を、三國シェフが担当。菜園での野菜の生育から、さまざまなだしを使った味覚の違い、食の歴史・基礎知識や食事のマナー、最後に調理実習として、子供たちが作った料理を、保護者の方々と一緒に味わうプログラムです。

調理実習でつくる江戸東京野菜入りの特別ハンバーグは、三國シェフと十数人のプロのシェフが、野菜の切り方から盛り付けまでを丁寧に指導し、マヨネーズまで自作という徹底したもの。保護者による授業参観を兼ねた試食会では、参加した保護者の方々が、慣れない料理に懸命に挑む子供たちを温かく見守っていました。

このように、人と食について考え、話し合う機会をより大切に演出するのが三國流。この食育教育を機に、食事の材料や調理法に興味を持つ子供たちが増え、保護者にとっても子供と話し合ったり、食について考え直すきっかけになっているそうです。

大学生が幼稚園児の手を取って、一緒に楽しんだ芋掘り

園児と接するイベントだけではなく、幼児教育の裏方について体験できるイベントも、大学生の人気は高いそうです

（東京都市大学／二子幼稚園）

東京都市大学と二子幼稚園による「幼大連携」幼児教育の現場が学べると学生に好評

東京都市大学では、“幼稚園から大学までの一貫教育環境”を実現した都市大グループの強みを生かし、特徴ある教育環境を実現するため、さまざまな学校間連携の取り組みを行ってきました。特に最近では、東京都市大学と二子幼稚園とで、年間を通じた継続的な幼大連携の取り組みを行っています。

この「幼大連携」事業は、都市大人間科学部の1～4年生の学生を対象に、登録制の「学生サポーター」を組織し、二子幼稚園の年間9行事、その準備や後片付けも合わせて全21回のイベント支援に参加してもらう「実習型連携」。大学生は、より実践的なキャリア教育の機会が得られます。また幼稚園も、専門的に幼児教育を学ぶ学生と一緒に、新しい発見・工夫をしていくことなどもできるため、双方にとって大変メリットのある取り組みとなっています。遠足や芋掘り、運動会や夕涼み会などに、大学生が幼稚園児の手を取って、お話をしたり面倒をみたりなど、自然な交流が行われる様子がよく見られるようになりました。

そんなメリットが学生にも理解されたのか、初年度となる昨年は応募枠60名に対し94名の応募が、また今年はそれをさらに上回る143名の応募があったそうです。このように、増加傾向にあることを思えば、大変な反響だといえるでしょう。また、「園児と触れ合える」イベント以外にも、実際の行事運営を学ぶことができる“運動会の事前準備”などへの参加希望も多く、さまざまな角度から実際の幼児教育が学べる機会として、今後もこうした取り組みを育てていきたいと考えています。

母校の発展をめざして

より良い大学生活を支援する、
東京都市大学校友会の取り組み

健康的な朝食を、100円で学生に提供

「朝活応援！ ワンコイン朝食」

100円メニュー実施初日の世田谷キャンパス「ラウンジ・オーク」は、想像以上の盛況ぶり。

世田谷キャンパス初日のメニューは「さばの四川味噌焼き」。

東京都市大学各キャンパスでは、昨年7月14日から同年8月6日まで、および9月22日から今年1月30日までの平日、在学生を対象に、栄養バランス満点の朝食メニューを、なんと100円で食べることができる「朝活応援！ ワンコイン朝食」を試験的に実施しました。

100円朝食といったって、おにぎりや菓子パンなどの簡素な食事ではありません。写真の世田谷キャンパス「ラウンジ・オーク」で開催初日に学生に提供されたのは、さばの四川味噌焼きにサラダ、卵焼き、ホウレン草ともやしの和え物、味噌汁にご飯と、かなり本格的な和定食。通常なら400円で提供されている内容です。

この100円朝食は、学生が栄養バランスの良い朝食を気軽に食べられる機会を提供することで、朝食の習慣化促進、脳の活性化や健康面のサポートなどを目的とするもの。校友会と父母後援会、大学がそれぞれ100円ずつを出し合い、1食につき合計300円の補助を付けることで、学生に100円で朝食を提供できるようになりました。

用意されるメニューはキャンパスごとに若干異なり、毎日各1種類のみですが、和食と洋食が1日ごとに交互に提供され、飽きがこないよう工夫されています。世田谷キャンパスでは、初日は開始前から40名ほどの学生が並び、用意された80食が30分で完売する盛況ぶり。その他のキャンパスもそれぞれ若干の差はありましたが、どのキャンパスでも健康的な朝食が100円で食べられるとあって、多くの学生が詰めかけていました。

意外な発見も多かった利用傾向

もともとは、“1限目から授業に出てもらいたい”、“一人暮らしの学生に、ちゃんとした食事をとる習慣をつけてもらいたい”ということからスタートした取り組みですが、一方で都市大では課外活動の朝練なども少なく、どれくらいのニーズがあるのか不安もありました。そこで当初は3週間限定、食数限定の試験運用としましたが、反響としては非常に好評で、学生からの声の大半は100円でこうした食事ができることへの、驚きや歓迎の声が寄せられたそうです。

また実際に始まると、意外な発見も多かったとか。当初、今どきの若い子はおしゃれな洋食のほうを好むのでは、と予想していましたが、ふたを開けてみると和食のほうが人気があり、「一人暮らしだと家で魚を焼いたりしないので、焼き魚がここで食べられるのはうれしい」といった声が多く寄せられました。また男女比も、9割方が男子という当初の予想に反して、女子学生の利用も多く、毎日利用している子も少なくなかったそうです。

続出するリピーターに、確かな手ごたえ

試験運用の最終日に行った調査では、「初めて来た人」は4～5人で、それ以外はリピーターとのことでした。リピーターが多いということは、今後継続して行ったとしても、現在同様に利用してもらえることが考えられる、大変心強い結果です。今回は期間限定の実施でしたが、全体的に歓迎ムードが強く感じられられたことから、今後はより効率的な運用を考えながら、長く続けていきたいと、運営にあたる学生支援センターでは考えており、平成27年度も継続して実施していきます。

こんなところでも役立っています！ 校友会の支援事業いろいろ

「インターナショナルラウンジ」、「毎日学べる英会話講座教室」の運営補助

本学では現在、語学教育の推進のため、世田谷キャンパス8号館1階811教室に「インターナショナルラウンジ」を設置し、いつでも英会話を学べる環境を整えました。

ネイティブ講師と40分間自由に話せる「EC（イングリッシュチャレンジ）」、また㈱リクルートが提供するSkypeを用いたオンライン英会話「英会話サプリ」が常時利用できるようになっています。

また、ネイティブの講師による「毎日学べる英会話講座」も実施しておりますが、これらの運営も、校友会からのご支援のもと行われています。

TOEIC® 学内試験受験料の補助

年6回実施している「TOEIC 学内試験（団体特別受験制度＝IPテスト）」の受験料の一部は、在学生の受験促進と語学力向上を目的として、校友会より一部補助を受けています。

学外で受験をする場合には、通常5,725円かかるところを、学内では団体特別受験制度として3,100円で受験することができますが、現在は校友会からの補助により、1,500円での受験が可能となりました。これにより、TOEICの受験がより身近なものとなり、より多くの学生が受験するようになりました。

ボランティア活動へのオリジナルTシャツの提供

ボランティア活動の際に着用するTシャツを作成し、提供しています。品質等を重視し、「UNDER ARMOUR」社製のTシャツを使用しています。

これまでボランティア活動の際に着用するTシャツも統一したデザインがなく、一目で明確な状態ではなかったために、学生もボランティア活動に参加していて多少やりにくい面があったそうですが、統一したデザインTシャツが導入され、この問題は劇的に改善されました。ボランティアの現場では、関係する多くの方に頼られるようになったのみならず、メンバー同士の連携も取りやすくなったそうです。

東京都市大学は
創立90周年、創立100周年に向けて
「アクションプラン2030」を推進しています

ビジョン達成にむけて ―アクションプラン2030―
4つのプロジェクトによる事業計画を推進します。

- 教育の質保証
- キャンパス教育環境向上
- ブランド力向上
- 大学運営向上

創立100周年
（2029年）

目指すビジョン

国際都市東京で
存在感を示す
有数の私大

創立90周年
（2019年）

＼卒業生の皆様!!／

東京都市大学グループの「八ヶ岳山荘」をご利用ください。

「八ヶ岳山荘」は東京都市大学グループの在校生・教職員・卒業生とその家族のための施設です。

八ヶ岳の山麓清里高原にあって、四季折々の自然を楽しめます。登山やトレッキング、高山植物・野鳥の自然観察、ゴルフ・テニス・スキー・乗馬などのスポーツ、さらに温泉・美術館めぐりアウトレットショッピング等々あらゆるリゾート・レジャーの拠点としてオールシーズンご利用いただけます。

同窓会やご旅行、レジャーなどご家族や友人を誘ってご利用ください。

現在、特別利用料金を実施しており、通常料金5,500円（1名様1泊2食付）のところ、4,500円にてご利用いただけます。

（左上）付近スキー場から望む富士山
（右上）山荘正面
（右中）裏庭から見た山荘
（左下）エントランスホール
（右下）くつろげる和室

特別料金
実施中

1泊2食付4,500円

学校法人五島育英会八ヶ岳山荘
〒407-0301
山梨県北杜市高根町清里3545-1（学校寮地区内）
TEL:0551-48-2019

お問合せ・お申込み
学校法人五島育英会：法人本部総務グループ［計画担当（人事）］
〒150-0043 東京都渋谷区道玄坂1-10-7 五島育英会ビル8階
TEL:03-3464-6915 FAX:03-3464-6650
http://www.goto-ikuei.ac.jp/yatsu

都市大と卒業生をつなぐ広報誌
東京都市大学
VOL.1
2015/4
発行・問合わせ先　東京都市大学 企画室
〒158-8557 東京都世田谷区玉堤1-28-1
TEL.03-5707-0104（内線2082）　FAX.03-5707-2222